

チエルノブイリ通信

発行 チエルノブイリ支援運動・九州 事務局
連絡先 北九州市八幡東区春の町1-3-7 日岡荘2号
Tel·Fax 093(681)1780

口座番号 福岡7-65328

加入者名 チエルノブイリ支援運動・九州

1994年1月18日

No.

23号



А у нас его пациентам просто и неизвестно. Санаторий расположены в Крымске, в живописном месте. Условия для лечения и оздоровления прекрасные. Так санатории 120 ребят, что приехали из заграждений радиационной зоны. Диктор прописывает им вместо горьких лекарств и питья ароматные настои из трав. Общукрепляющий и ан-

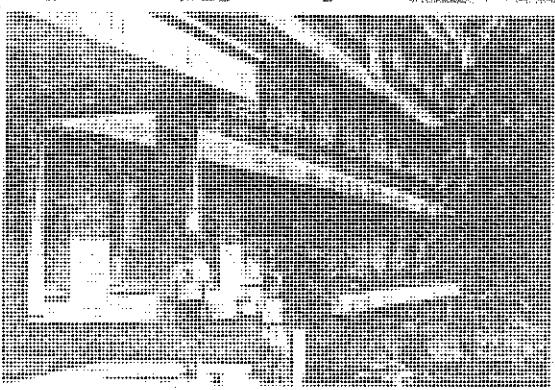
тический климат, и психологический комфорт — почти рядом родители и дамы, можно чайко пить.

Ну, и в природе и говорить не приходится...

Валентина ШИМОЛИНА.

Фото Олега ПОПОВА

НА СНИМКАХ: ребенок — в венок; аппетит, приходит во время еды; "Прелест — ванна с травами" — улыбаются гомельчанка Марина Рагузова, и ее настроение разделяет медсестра Валентина Павловна Сасюлюк; Вале Шевченко из Гомеля прописана ингаляция; главный корпс санатория.



モズィリからの手紙

エレナと「パレスカヤ・ソーラチカ」より

こんにちは！友人のみなさん。深江さん、中村さん。

まず、「パレスカヤ・ソーラチカ」のリーダーとして。みなさんが私達のためにしていただいたすべてに対して感謝申し上げます。

日本での旅行は、まるで別世界で童話の世界でした。私たちに大きな印象を与えた。これは最もすばらしいこととして一生のこころでしょう。私たちを快く受け入れていただいた皆さんに感謝いたします。アンサンブルの子どもたちは学校や家で、友だちや家族に、日本での色々なことを話しています。

モズィリに戻って、社会エコロジー同盟支部長のリディア・ラリコさんと一緒に子ども病院に行き、血液分析器を贈呈しました。贈呈式には、市の保健医、院長、親、子どもたちが出席しました。モズィリテレビも取材にきました。又、モズィリ支部には500ドルを渡しました。以上は、すべてビデオにおさめてあります。もう一度、市の名において、貴重なプレゼントに対して感謝いたします。

次に私たちからの提案があります。私たち（アンサンブル）は、みなさんをモズィリにご招待したいと思います。1994年6月1日から5日まで、ここモズィリで国際フェスティバルが開催されます。私たちも出席します。あなたがたが、これに来ら

れれば、非常にうれしいです。とりわけ、私たちが知りあったモダンダンスの人々がおいでになればいいのですが。（「ヤマダミホコ」サン、鹿児島市ナカマチ4-16 ☎0992-23-1947 「ヤマダモダンダンスコーポレーション」モダンダンス協会会員）彼女がアンサンブルと一緒に来られればよいのですが。国際フェスティバルに招待したいと思います。このフェスティバルは、「子どもを救おう」というのが目的です。ビザを取るために必要な書類を教えて下さい。

手紙がどれ位で届くか知りません。新年のあいさつがおくれないかと心配なので、今、申しのべます。

クリスマス、新年おめでとう！

みなさんとあなたの家族に幸せと健康と平和と愛を！

住戸

174-2 International Street Mozyl
247760 Belorus. MS.Rudenko Elena

もう一つあります。写真を受け取りました。封筒には「Hoshi Masataka, Japan」としか書いてありませんでした。お札を言いたいのですが、住所が分かりませんので、写真を送っていただいた方にお札をお伝え下さい。なお、写真のうらには、「大分駅にて」と書いてありました。

「切尔ノブイリ通信」No.23号を お届けします

通信No.22号を10月末に出して以来の通信になります。予定では第四回総会報告と合わせて、12月中旬には発行することにしていたのですが、会計報告が間に合いませんでした。という訳で遅くなりました。が、第四回総会報告をお届けします。また、資料として「切尔ノブイリ原発事故による高汚染地における小児甲状腺障害」というレポートを同封しています。ご一読ください。

さて総会の核心ですが、前号でもお知らせしていた通り、会の運営を含めた事務局体制をどうするのか、ということと、その運営費をどうするのか、というのが大きな議題でした。周知の通り、「支援運動・九州」は結成からこの4年間、年会費100円ということで会員を募り、事務経費を捻出してきました。ほとんどが事務的経費で、年6回発行している「切尔ノブイリ通信」にかかる経費や、その時々の資料等の制作、発送の経費で底をつくという、以前からギリギリの線で運営していたわけですが、もはや限界というところまできています。

何が限界かというと財政問題と共に、事務局機能がもはや限界にあります。単に通信を出す程度ならば、今までも何とかできますが、会計の処理が追いつかないという現実です。会員数が700人前後のころから遅れ遅れになっていたのですが、一気に2000人を超える規模になったために、事務処理がほとんどマヒしてしまいま

した。おまけに昨年は年2回の現地派遣を行い、夏には大イベントを行い、会員が2000人に増えたのに今まで通りのスタッフで事務局を運営している訳ですから、自ずと無理があります。しかも、それが二足、三足のわらじを履いての事務局スタッフですからなおさらです。しかしながら、会計報告が遅れ遅れになるという現状が続くことは、運動に対する大きな不信感を生むことになります。

そこで先の第4回総会の場で、「この現状を解決するためには、支援運動・九州の事務所を構え、専従の事務局員を置くしかない」という結論に達しました。問題は、その経費をどうやって集めるのか、ということです。

郵便料金の値上げなどもあり、通信などの制作、発送にかかる費用だけで年間約150万円ほどになります。また、事務所の維持費や専従者の賃金で約150万円です。(家賃は「北九州かわら版」と無農薬コーヒーの「切尔ノブイリ友の会」3団体で負担することになっています。)

基本的な事務費だけで約300万円必要となります。このお金を会費だけで徴収するというのは、この間の実績や他団体の状況をみても厳しいものがあります。そこで現実的な方法として、会費として徴収するのではなく、募金の中から二割を限度として自動的に運営費に充てる、ということにしました。

「二割を限度に」というのは、二割まで

だったらいくらでも使っていいというのではありません。極力費用は抑えていくという意味での「最低限の費用」としてご理解ください。

ようやく事務所がオープンしました

そういう訳で、「チェルノブイリ支援運動・九州」の事務所が1月8日に無事オープンしました。所在は私の職場である八幡郵便局のすぐ隣で、八幡東区春の町一一三一七、日開（ヒビラキ）荘、一F二号です。

駅の近くの方が、いろいろ当たってみたのですが、いかに寂れる一方の八幡東区とはいえ、さすがに駅の周辺には物件がなく、春の町に落ち着きました。八幡駅から歩いて10分ぐらいの所です。私個人としては場所的には大歓迎しています。いろんな理由で。

また専従の事務局員もどうにか決まりました。グリーンコープ連合を通して里親になってもらっている大倉純子さんといいます。北九州市若松区在住です。（大倉さんの自己紹介は次号で行いますが、今後は彼女が事務連絡を一手に引受けることになります。よろしくお願ひします。）

常駐するのは、月～金、午前10時～午後4時までの時間帯になります。これまで、何度も電話をしても捕まらない、と電話をするのを諦めていた方も、これからは大丈夫です。すぐに対応できるようになります。どしどし、電話をしてきてください。

北九州市八幡東区春の町1-3-7

日開荘1F2号

Tel・Fax.093-681-1780

「汚染地に住む人々は今」発売中！ チエルノブイリ第三次調査ビデオ

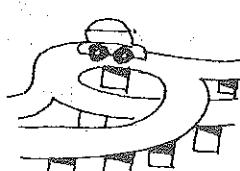
7月11日から10日間の日程でペラルーシを訪れた第三次調査団の「生」の記録が、ビデオになって甦りました。なにぶん、生のビデオですから出演者が見るには多少恐い気もしましたが、これが中々、自信を以てお薦めできる作品に仕上がってます。

中身を少し紹介すると、先ず、延々と続く無人の荒野と激しく鳴り響くガイガーカウンターの音がプロローグに使われています。ナレーションが入り、場面は成田空港へ。300kgもオーバーした支援物資を前に、早速苦惱の調査団の面々が。画面はその後、モスクワのミチノ墓地、ミンスクのナバト事務所、放射線医学センター付属病院、モズィリ市でのパレスカヤ・ゾーラチカの子供たちとの交流、ホイニキ地区病院、30キロゲート、バプチן研究所、廃墟となったゾーン内のドロヌキ村と続きます。

随所にウォッカの洗礼を受ける場面が挿入しており、居乍らにしてペラルーシが体験できるビデオになっています。

時間にして43分。ナレーションはビデオを制作した宮崎の宝蔵さんです。この声がいかにもそれらしい、という響きを持っており、とても素人が作った代物とは思えません。ということで、このビデオを1本3千円でお分けします。もちろん、この値段にはチエルノブイリへのカンパが含まれています。

（深江）



Chernobyl Relief Movement - Kyushu

第4回総会・報告

活動報告について

1992年10月～1993年11月

1. 調査団派遣

- ① 12月6日～12月14日の日程で第二次調査団を派遣。12月1日にミンスク市スタイキ村にオープンした「サナトリウム九州」の運営費5万ドル（6.34万円相当）と超音波診断装置一台、絵本などを届ける。
- ② 7月11日～7月21日の日程で第三次調査団を派遣。サナトリウムの運営費2万ドル（22.2万円相当）と血液分析器、自動血球計測装置、医薬品、ビタミン剤などを届ける。

2. パレスカヤ・ソーラチカ公演

- 9月5日 来日（成田～福岡）
宿泊：「遊学山荘」（糸島）
- 6日 お休み、糸島にて観光。
宿泊：「遊学山荘」
- 7日 福岡市早良市民センターにて公演。宿泊：福岡市
- 8日 北九州市立響ホールにて公演。
宿泊：北九州市
- 9日 メートプラザ佐賀にて公演（午後と夜二回公演）。
宿泊：佐賀市

- 10日 長崎市平和会館にて公演。
宿泊：長崎市
- 11日 キャンプ。熊本県阿蘇郡阿蘇赤水「阿蘇百姓村」
- 12日 鹿児島市中央公民館にて公演。
宿泊：鹿児島市
- 13日 お休み（姶良郡の「青雲病院」にて検診）。宿泊：鹿児島市
- 14日 宮崎市・県医師会館ホールにて公演。宿泊：宮崎市
- 15日 大分市コンパルホールにて公演。
宿泊：大分市
- 16日 下関市勤労福祉社会館にて公演。
宿泊：下関市市
- 17日 お休み（宗像市周辺観光）。宗像にてホームステイ
- 18日 宗像市・福間町公民館ホールにて公演。宿泊：宗像市
- 19日 東京へ移動、豊島園にて観光。
宿泊：東京
- 20日 成田からモスクワへ

※ 九州、山口11ヵ所での切尔ノブイリの今を伝える講演とパレスカヤ・ソーラチカの公演、交流会を行い3500人を越える人たちが参加しました。

■問題点と今後の課題

- ① 来日メンバー、日程の変更、そして来日してからのプログラムの変更と変更づくめであった。
- ② 様々な情報がギリギリにならないと届

かない。

- ③ 当日の運営に精通したスタッフが同行すべきではなかったか。
- ④ 大きな企画であったにもかかわらず、準備期間が短すぎた。企画が決まっていた、などの指摘がありました。

□

①、②については、ペラルーシ国内の事情が大きく反映しており、お互いの常識のギャップを埋めていく必要性を感じています。特に今回のように、16人のメンバーが日本にやってくるという大がかりな企画の時は、事前の打ち合せだけで半年くらいの時間が必要かもしれません。

また、日本からの連絡が、ミンスク経由ということもあり、モズィリーミンスクー日本という距離が、日本で思う以上に「遠い」という事情もあったようです。福岡にやってきてプログラムが変わり、翌日、また変わるという、ほとんど直前に対応するという状況もありました。これら当たりは、「言葉の障壁」が大きいようでした。確認しなければならないことが多すぎて、確認した上で「お互いのモレ」があるわけです。

③については、A→B、B→Cとそれぞれの実行委員が送りとどけ、打ち合せすることにしていましたが、それぞれの実行委員会の事情もあり、完全にはできませんでした。事務局が随行するということは不可能であり、今後の教訓にしたいと思います。

④については、2月15日付け通信で提案を行っています。が、その後、グリーンコープを通しての里親、基金の申し込みが殺到し、その事務作業に終わることと、第二次調査団の報告集を作成しなければならなかつたことなどあり、具体的には4月

の終わりからしか準備がスタートできませんでした。同時に第三次調査団の派遣の準備にも入り、なにもかもがバタバタ、という面は否めませんでした。

大きなイベントを行うときには、専用のスタッフを組むことが出来れば、ほとんどの問題は解決するのですが、現状では厳しいものがあります。

3. 通信の発行

- 10月24日（No.16号）発行
- 11月27日（No.17号）発行
- 2月15日（No.18号）発行
- 4月19日（No.19号）発行
- 7月 1日（No.20号）発行
- 8月12日（No.21号）発行
- 10月22日（No.22号）発行

□

No.17号までは発行部数、約700部でしたが、No.19号からは2000部発行しています。（No.18号については4月初めに増刷して資料として1300部発送。）

この当たりから、事務作業が追いつかなくなっています。

4. 報告集、報告ビデオ、パンフ制作

- 第二次調査団報告集「サナトリウム九州」オープン（152頁）、2200部作成し全員に送付。
- 第三次調査団報告ビデオ「汚染地に住む人々は今」（43分）、価格3千円。出来たてのホヤホヤです。
- パレスカヤ・ゾーラチカ公演にあわせ、資料・モズィリの子供たちに医療機器を送ろう！制作。

5. 支援物資

- 12月…超音波診断装置（一台）、絵本類、

5万ドル。

7月…血液分析器（一台）、自動血球計測装置（一台）、両方の試薬1200人分。2万ドル。ミキブルーン70kg、放射能測定器（一台）。
9月…血液分析器（一台）と試薬750人分、総合ビタミン剤（20キロ）、感冒薬（一万人分）、他。
血液分析器（一台）は日本ロシュ（株）より寄贈。ミキブルーン70kgは大分の会

員より寄贈。総合ビタミン剤、2m四方のパッチワーク5枚、「チエルノブイリ救援・えひめ」より寄贈。

6. 支援運動・九州の組織実態

名簿会員…1988人

会員数…892人

里親…504人（60人ほど未納）

通信部数…2050部

協議事項について

1. 「里親運動」と今後の取り組み

昨年、「サナトリウム・九州」をオープンさせるにあたって、「サナトリウムにかかる費用は、一人につき一ヶ月3500円。一人の子供のサナトリウムへの入所期間が一年として、その間の費用を里親として一年の間面倒を見ていく」という「里親運動」を呼びかけました。サナトリウムへ入所する子供は200人ですから、里親200人を目指に。

おかげさまで予想を上回る方々に「里親」になっていただき、「サナトリウム・九州」は順調に運営されています。医療機器も整い、ますますその重要性も増しています。

■いくつかの問題点

● 入所期間が当初の「1年間の保養」から、「3週間の保養とし、より多くサイクルさせる」ことになりました。『3週間というのは、病気と闘うという気持ちをもたせるのにはちょうどいい期間ではないでしょうか。』とは、サナトリウム

主任医師の弁です。

- そのために「一人の子供の入所費用を一年間面倒見る里親に」という呼びかけには無理がでてきました。
- また、インフレの問題があります。混乱する政治と経済は、物価を大きく押し上げています。そのためサナトリウム開所当初に比べ、維持費が2倍近くになっています。ペラルーシの経済がインフレでもドルや円が安定していれば関係ないのではないか、と思われる方もいると思いますが、そうではありません。ルーブルと円の交換比率は、昨年末で1円=2ルーブルでした。現在は1円=9ルーブルです。ところが、物価の上昇はこの2年で300倍になっています。いくら円が強くても追いかねのが現実です。

■「里親運動」について

サナトリウムにかかる経費が「1人につき一ヶ月3500円」（実際は5000円）から、現在では「1人につき一ヶ月100ドル」になっています。

「サナトリウム・九州」の運営、維持のためこの1年、「里親」ということで「1人の子供にかかる経費を一年間保証する」

ということで呼びかけと、お願ひをしてきましたが、以上のような状況から今年度からは「里親」ではなく、「サナトリウム運営委員」ということで呼びかけをしたいと思います。

具体的には、

- サナトリウム運営基金=一口、月3500円×12カ月。(サナトリウムの運営費に充てる)
- チエルノブイリ医療援助基金=一口、2000円※何口でも可。(医療機器、医薬品、安全な食料提供のために充てる) ということで、お願ひします。

2. この一年の主な取り組み予定

1. 調査団の派遣(2回程度)

- ※ サナトリウムの運営費、医療機器の点検、医薬品の補充など。
- ※ サナトリウムの視察、病院などの視察。
- ※ 交流……など。

● 第4次調査団の派遣

※時期

※メンバー

2. 医療研修の実施について

5月か6月頃に医療研修のために、ペラルーシから医師を招いてはどうでしょうか。条件は、英語を話せることで、2人ぐらいがいいのではないかと思います。

残念ながら今年はボランティア貯金の利息配分を受けることが出来ませんでした。理由は、医療交流、専門家の援助などの活動が「支援運動・九州」の活動に入ってなかったことです。このこと自体の評価はいろいろありますが、医師の派遣、あるいは受け入れることを活動のなかに入れ込むことで、ボランティア貯金の配分が受けられ

るのなら検討の予知があると思います。

3. リーフレットの発行

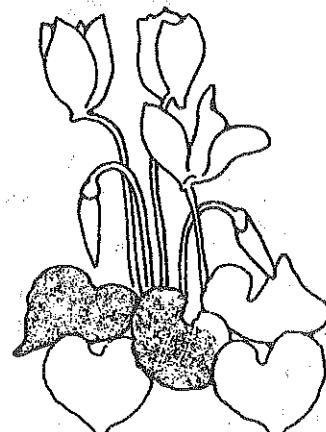
ペラルーシで作られたパンフをロシア語と日本語併用でパンフを作りたいと思います。すでに翻訳は終わっており、あと編集するだけです。今回は販売を前提に作りたいと思います。従って売れるぐらいの数を作ることになります。

4. 会員制、事務局体制、機能について

これまで年会費1000円ということで事務経費を捻出してきました。以前からギリギリの線で運営していたわけですが、もはや限界というところまでできています。そこで他団体の運営方法を参考にさせてもらうことにしました。

- ① 年会費2000円、賛助会員年1万円、というものや、
- ② 募金の1割から2割を自動的に運営費に充てる、というものです。

事務局体制、機能の問題ですが、事務量等の多さのため、処理が遅れ遅れになってしまっています。事務の遅れは、信用の問題にも響いてきます。そこで、今期から事務局員の半專従体制で運営していきたいと思いますが、いかがでしょうか。



サナトリウム九州の 子どもたち

1. ミーシャ マルノフ

1982年9月21日生まれ 11歳

父 ウラジーミル トラクター運転手

母 1991年病死

妹 アニヤ (1984年生まれ)

妹たちと一緒にサナトリウムに滞在

読書、スポーツ

住所: 17-26 Lutsukoy St. Brest Belorus 224011



2. リーリヤ プロノワ

1985年生まれ 8歳

母 リリヤ オペレーター

父 ウラジミール 組み立て労働者

姉 ナターシャ 20歳 兄 ボーバ 13歳

いとこ レーナ 17歳 ユーリヤ 1歳3ヶ月

住所: 50-26 Lutsukoy St. Brest Belorus 224011



3. オーリヤ シエルバコワ

1986年生まれ 7歳

母 ワレンチナ 会計係

父 ウラジミール 車掌

編み物 お絵かき

住所: 101-17 Okutyablyskaya revolyutsiya

St. Brest Belorus 224011



4. ウラジーミル パラシェンコ

1981年5月5日生まれ

母 ワレンチナ 販売員

父 アナトリー 警察官

弟 アリョーシカ 9歳と一緒に来所

柔道 スポーツ チェス

住所: 12-26 Lutsukoy St. Brest Belorus 224011



5. アレクセイ カムーシュキン

1981年6月16日生まれ 12歳

母 マリア 幼稚園の先生

父 ワシーリー 挖削機械技師

弟 セリヨージャ 9歳 サーシャ 5歳

スポーツ チェス

住所: 24-26 Lutsukoy St.Brest Belorus 224011



6. オレーシャ トカチューワ

1984年2月11日生まれ 9歳

母 ワレンチナ 会計係

父 ユーリー 歯科技工士

姉 インナ 18歳

お絵かき 人形の服を作ること

住所: 25-7 October Revolution St.Brest

Belorus 224011



7. ジャンナ ツィトリコーワ

1984年2月23日生まれ 9歳

母 タチアナ 理髪師

父 ニコライ 建築技師

弟 イーゴリ

弟と一緒にここに来ています

亀のルンダをかっています。読書

住所: 43-26 Lutsukoy St.Brest Belorus 224011



8. ディアナ ゴンチャローワ

1984年10月23日生まれ 9歳

母 アンナ 理髪師

父 アナトリー 電気技師

ここにお母さんと一緒に来ています

お絵かき 水泳 ダンス



9. レーナ シュルノーワ

1984年1月24日生まれ 9歳

母 ベーラ

父 アレクサンドル 労働者

姉 ディンカ 10歳

弟 ミーシカ 3歳

読書 ダンス

住所: 36-26 Lutsukoy St.Brest Belorus 224011



第3次調査団報告

放射線医学研究所付属病院で遅い昼食をご馳走になった。2年前もここで昼食をご馳走になり、その時「クリュクワの実」のジュースを飲んだ。『このジュースはクリュクワという木の実で作っています。体内に取り込んだ放射能を早く外に出す作用があるのです。皆さんも飲んでみてください。』と真面目な顔でジュース（カンポート）を勧められたのを覚えています。甘酸っぱい美味しさでしたが、今回の旅で、本物の木の実を食べることが出来ました。場所はモスクワなのですが、とても酸っぱい赤い色をした木の実です。

今回その話をすると、『そうですね。でもそういうもののなら他にも色々ありますよ』と素っ気ない返事が。人によって違うようです。

病院を後にした私たちは、イベネツィ地区陶器工場を1時間ほど見学し、再びミンスク市に戻ります。

【物価の上昇は300倍、給料は…】

『フカエサン、少し時間がありますから、買物でもしませんか。』とガビドゥリンさん（サナトリウム主任医師）。『そうですね。ペラルーシの物価でも少し勉強しておきましょうか。』ということで、ミンスク市の繁華街へと繰りだすことになります。

まずはデパートにてウインドウショッピング。品数は大分増えたようだが、どれもこれも高すぎてとても買えません。1円が9ルーブルですから、値札を見ながら電卓

をたたきます。衣料品（アメリカ製）、電化製品（日本製）などは日本で買う料金と全く同じで、いったいだれが買うのだろうという感じです。ペラルーシ製でも高く、安いものがあったら買って帰ろうと思っていたのですが、買えそうもありません。デパートの中にはドルショップがあり、ドルでないと買えないものもあります。（ちなみにウォッカなどは店には置いてないので、ドルショップでアメリカ製を買うことになる。）・今度はスーパーに移動し、庶民の買物をします。入り口で牛乳を1本。『美味しいね。とっても濃いいわ。』と河野さん。『そうやろ、あとでアイスクリームも食べたらいいよ。美味しいけん。』と菊川さん。（人には勧めるが、本人は食べようとしない。何かわけでもあるのだろうか。）

さて、棚に並んでいる食料品を紹介します。先ずカンポート。いろんな果物を砂糖漬けにしたジュースで、お湯で溶いて飲みます。瓶詰になっており、所狭しと並べられています。圧巻です。生の果物が食べられる時期は限られており、ほとんどが保存食として利用されているわけです。肉や魚も同じで塩漬けか燻製かということになります。次に乳製品。牛乳から始まって、チーズ、バター、ヨーグルト。特にヨーグルトはいろんな種類があります。海がないペラルーシ、魚はすべて冷凍ものです。見たこともないような魚がドーンと並んでいます。食堂で食べる魚はどれも塩漬けですが、そうでないものもあるようです。さて、肉類

は、にわとり1羽が1500~2000ルーブル、ブタ、牛肉1キロ2000ルーブル、ハム1キロ2500ルーブル、トマト1キロ1000ルーブルという具合です。パンは、……私の口にあいません。面白いのは、露天で私たちが買ったウォッカは1本900ルーブル、コニャック1本100ルーブル、ところが500cc入り100%オレンジジュースは、何と2000ルーブルもするわけです。（モスクワで試食したマクドナルドのハンバーガーは100ルーブル。）ちなみにウォッカは配給制（大人1人月2本）になっており、400ルーブルで買えてしまいます。

『ずいぶんと物価が高いですね。生活は厳しくないですか』と聞いたところ、『2年前に比べて物価は300倍に上がりましたが、給料は15倍です。平均的労働者の給料は4~5万ルーブルですが、生活するだけで最低4万ルーブル必要です。1番厳しいのは年金生活者です。40年間仕事をして、月8500ルーブルしか貰えないのです。』ということです。かなり厳しいものがあります。

□

夕食はナバトの事務所です。ナバトのスタッフが歓迎レセプションを開いてくれました。お互いに挨拶を交わしながら杯を重ねていきます。普段あまりお酒を飲まないヤコベンコさんも、この時ばかりはウォッカを水のように飲み乾します。やっぱりみんな（むこうの人は）飲めるわけで、私たちとしてはついていくのが大変です。多少お酒が入ってくると、日本語とベラルーシ語で話が通じるようになります。相手の表情を見ながら、「ダー」「ニエット」「スペシャバ」と適当に相づちを打ち、話が通じた気になるから不思議です。

宴会も準備に入ると、やっぱり歌の交歓が始まります。今回の主役は何といっても宮崎の宝蔵さんです。振り付きの民謡が飛び出しては、もう任せることありません。刈干し切り歌、きこりの歌と中々のノドを披露してくれました。以後、彼の存在は「首席（酒席）代表」として重きをなすことになります。

7月15日（木）

昨日のレセプションでウォッカを飲みすぎたせいか、今日は少し頭が重い。目覚めた頃は朝日が差し込んでいたのに、また雨です。午前9時、事務所に移動し軽く朝食をすませます。今日はモズィリ行、ちょっとしたドライブです。

午前11時にミンスクを出発。約6時間かけてモズィリ市へ。地図では1本道という感じですが、ところがどっこい。いたるところで道を尋ね、右へ行ったり左へ行ったりです。尋ねる人によって答えが違う訳ですから、運転するほうも嫌になります。私たちが乗っている車は、カタログハウス・モスクワ連絡事務所のワゴン車で、運転手はもちろんモスクワっ子のヨセフさんです。そういうわけで道は分からぬのです。もっともミンスクっ子も分からぬようですが。運転をしながらヨセフさんが何回か独り言を言います。『あのやろう、ウソを教えやがった。』

途中、ジロービン民芸品工場に立ち寄り、木箱の民芸品を大量に仕入れることになります。

工場長に案内されながら、『あなたたちは運がいい。ここで作られる品物は、明日から倍の値段で売されることになっています。倉庫に置いてある商品は今まで通りの値段ですから、いくらでも持っていってく

ださい』。いきなり「明日から2倍になります」と言われるとビックリしますが、今のペラルーシなら「何でも有り」かなという気がします。『深江さん、同盟からプレゼントしますからいくらでも持っていくてください。』とヤコベンコさんに言われ、お言葉に甘えて段ボールに2箱分ほどもらって帰りました。（これらはパレスカヤ・ゾーラチカ公演の時に売りましたが、福岡、北九州、佐賀の3会場だけですべて売れてしまうほど好評でした。）

【チェルノブイリ同盟モズィリ支部】

ゴメリ州モズィリ市、チェルノブイリから100キロ圏にある町です。人口は13万7千人で、そのうち15才までの子供は2万5千人です。住民の3分の2以上は甲状腺肥大の第2期にあり、52%の子供たちが甲状腺肥大第一、第2の段階にあるといいます。

この町でチェルノブイリ支援のための活動を始めた2人の女性がいます。チェルノブイリの被害に苦しむ子供たちを見ながら何とかしたい、そう思っていた2人がミンスクに誕生した「チェルノブイリ同盟」のことを知り、同盟モズィリ支部を作りました。リーダー長とエレナ医師の2人です。そして今では多くの人たちが同盟と共に活動をしています。プリピャチ川を越えるとそこがモズィリ市。『深江さん、今日はこの川に船を浮かべて船上パーティだそうですよ』とヤコベンコさん。『パーティですか。でも今日はウォッカ抜きでお願いしたいですね』。（これは本心です。）

プリピャチ川。この川の9.5キロ下流にチェルノブイリ原発があります。今も1、2、3号機が動いています。原発労働者のために作られた町の名がプリピャチ。廃墟

と化したその町へと続くプリピャチ川に船を浮かべ、同盟モズィリ支部主催による歓迎パーティが開かれた。

出席者はリーダー長、エレナ医師、それに副市長のワレンチコさん（女性です）、国立モズィリ教育大物理学教室のウラジミールさんや実業家のドブロフスキさんと10人程です。簡単に同盟の活動について聞きました。活動の柱は放射能の検査です。特に食物の検査を行っています。検査に協力しているのは教育大の物理学教室。

『モズィリに調査研究センターを作っています。モズィリ市内の各所でサンプルを採取し分析しています。これまでに1800の食物のサンプルを検査しました。きのこや豆類は特に放射能値が高くなっています。91年のデータでは、この町の食品の57%が基準値を越えるほど汚染していました。しかもその基準値は世界的基準と比べると桁違いに高いのです。この町の人たちは汚染した食品を食べざるを得ないです。私たちは、最低子供たちが学校で食べるものは監視するようにしています。』

『基準はどれくらいですか。』

『飲料水が1.9（ベクレル/㍑）。牛乳が1.11、粉ミルクは7.40、じゃがいもで3.70、パン類は1.85、やさい類やチーズ、バター類も1.85です。きのこになると3700ベクレルになります。』

プリピャチ川をゆっくり回遊しながらの船上パーティは最高の接遇でしたが、その分、より多くの期待を背負わされた感じです。

『外国人の人たちがよくミンスクには来るけれど、汚染地には来ない。ここには何も届かない。日本に帰ったら、ここで人々がどういう風に生活しているかを正確に伝えてください。』と言われてしまいました。

『もちろんです。そのためにきたんですから。』

モズィリ市に着いてからは、いろんな所で放射能値の測定を行いました。町全体としては、0・2マイクロシーベルト～0・6マイクロシーベルトの間です。自然放射線のレベルから、その3、4倍というレベルで、平均すると汚染レベルは2倍から3倍か。

7月16日（金）

今朝もやっぱり小雨がパラついています。7月といえば夏です。当然私は半袖しか持ってきていません。革命的根性で寒さに耐えていましたが、ついに風邪を引いてしまいました。朝目覚めるとノドに痛みが。

『やばい。こんなところで風邪なんか引いてしまったら、日本まで帰れるだろうか』と真剣に心配してしまいました。さっそく薬を飲みますが、寒さから身を守るための上着は見つからず、こちらの方は更に根性を絞りだすしかないようです。

今日はいよいよ激甚汚染地へと向います。 Chernobyl から 50キロの町ホイニキ、30キロにあるバプチ研究所、そして 0キロ圏の中へ。

【ホイニキ地区病院】

Chernobyl から 50キロにある町ホイニキ。地区病院に立ち寄り院長のアレキサンドル・カリツォフさんに話を聞く。

『病気になる率が約10倍になっている。 Chernobyl の事故の前、この病院には小児科医は1人しかいなかった。今は、1台のエコーと12人の小児科医で検査と治療をしている。全体的な病気、消化器管や胃などの病気が増えているが、以前には考えられなかつた病気も増えている。それは、

2、3ヶ月の間に受けた放射性ヨウ素の影響だと思う。免疫機能の低下など、甲状腺の被曝が原因です。子供の腫瘍もある。事故前に、子供に腫瘍が現われた例はない。特に甲状腺ガンは子供については1例もなかった。大人のなかにまれにあった。ゴメリ州ではこれまでに77人の甲状腺ガンが発生した。この地区では3人だが、まだ10人の対象者がいる。ガンになったかどうかの最終判断は国家が行っている。細胞検査はミンスクでしか行ないのでミンスクに送って調べている。……何か質問があつたらどうぞ。』

『子供たちにどんな病気が増えているのか教えてください。』

『そうですね…。事故後、甲状腺肥大が見られるようになりました。40%の子供たちは肥大です。消化器官の病気は10倍になりました。胃潰瘍や胃炎などの胃の病気も多い。ノドや気管支の病気も10倍になった。全てが放射能の影響というわけではない。事故の後、放射能を恐れて極端に野菜類を取らなくなり、ビタミン不足が恒常化している。そのために血液のなかの栄養のバランスが悪くなっている。そのことも病気の原因になっている。』

『町全体の問題として大きく変わったことがありますか。』

『健康の問題で言えば、心理的なものが大きい。例えば、「森に入ってはいけない。キノコ、木の実を取ってはいけない。川に入ってはいけない。魚を取ってはいけない」と、突然、そんな生活を強いられたら心理的影響は計り知れない。科学者でさえも、ここに住んでいいのかどうなのか分からぬ。心理学者が調べたところ、住民の99%は心理的な問題「病気でもなければ健康でもない」そんな状態にある、といつてい

る。』

またこの町の問題としていま深刻なのは、いろんな専門家がいないということです。

『学校の先生、食料品店主、あるいは修理をする人がいません。英語の先生がいないので子供たちは上の学校へいけません。暖房器具が壊れてもそれを修理する人もいない。若い医者は外に出ていった。医者の充足率は3分の1です。この病院で働いてもらうために30人を勉強のためミンスクに送り出したが、帰ってきたのは2人だけだ。』

『出生率はどうなっていますか？。』

『出生率も落ちた。ほとんどの住民に染色体の異常が見られる。人口が少しずつ減っている。生まれるよりも死ぬ人が多いからだ。この国が普通の生活が送れるようになるのは何時のことなのか、誰も分からぬ。ソ連邦が崩壊して誰も救けてくれない。』

ここホイニキの病院には写真家の広河さんがたびたび訪れている。

『あなたたち以外にも日本人が来ましたよ。』と広河さんの写真集を見せられた。『ああ、広河さんですね。よく知っていますよ。そういえば、 Chernobyl 避難民のカルテが無くなったのはこの病院ではなかったですか？。』『そうです。住民のカルテがごっそり盗まれた。どうなったかわからない。』ということでした。（この事に関しては、広河さんが「月刊現代」に詳しく報告しています）

【30キロハードゾーン】

病院を後にした私たちはいよいよ30キロゾーンの中へと向いますが、その前に昼食です。ホイニキ地区の関係者とレストランで昼食をとっていると人の良さそうな気さくなおじさんがやってきました。『アナ

トリー・センコクさんです。この地区の警察署長さんです。』と紹介され、オットと思っていたら、ゾーンゲートには警察官がいて、ゲートを開くには署長の許可が必要なんだそうです。

ホイニキ地区の汚染レベルは、0・4～0・6マイクロシーベルトです。これからどこまで上がるのか。多少心配ですが、心強い味方も加わり出発です。

町を離れると、見渡すかぎりの畑、麦畑やじゃがいも畑、牧草地が続きます。ゲートまであと2～3キロという所で放射能レベルを計りました。なんと1・2マイクロシーベルト、自然放射線の12倍です。ものすごい汚染地帯なのですが相変わらず麦畑とじゃがいも畑は続きます。30キロゾーンの中は危険だが、一步外に出れば安全だということになっているためだ。

確かにゲートには1人、警官が立っていた。一言、二言話をしてゲートを上げてもらう。車は一路、うっそうとした森の中を Chernobyl へと続く道を南下する。車のなかで測定器のスイッチを入れてみる。『オイオイ、1・5もあるよ。オー、2・1マイクロシーベルトに上がったよ。』車の中でこんな調子である。『外はどれくらいあるんかね。信じられんね。急いで通りぬけヨ。』

ゾーンに入って10キロくらいの所に記念碑が立っていた。『ちょっとお参りしていきましょう。』と車を止める。『あれは何の記念碑ですか？。』『戦勝記念碑です。ここは激戦地でした。』ペラルーシには至る所にナチスとの激戦をうかがわせる戦勝記念碑が立っている。早速汚染値を計ってみると、針はかるく振り切れた。

ドロニキ村に着いた。 Chernobyl から15～20キロの地点だ。事故当時60

100人の村人が住んでいたが、もちろん今は誰もいない。7年の歳月は人間の生活の臭いを消し、誰もいなくなった家には草花だけが勢いよく生い茂っている。廃墟になった家々に一軒一軒足を踏み入れる。家族の写真がそのまま壁に掛けられてある。ベッドの回りに散乱した洋服や雑誌、新聞……。慌ただしい非難の様子がうかがえる。

隣の家はどうだろうか。ドアを開けてまづ飛び込んできたのは人形だった。幼い子供でもいたのだろうか。テーブルのうえに置き去りにされた人形が二つ。台所には自

家製のカンポートのピンが中身の入ったまま並んでいる。どの家も同じような状況だった。

ここに住んでいた人々は、事故後どれくらいいたって避難したのだろうか。当時の放射線のレベルはどれくらいだったのだろうか。今の100倍、いや1000倍、ものすごい強力な放射線が飛びかっていたに違いない。避難していった人々は一体今どうしているのだろうか。

(続く……)

